

# **Women and Mission in the Nineteenth-Century Britain: The Case of Charlotte Tucker, a Female Missionary**

**Manami Tamura**

In Britain in the nineteenth century, women were made to believe in altruistic value under the predominant influence of Evangelicalism, and this led to many undertaking charity work. However, even though it was for the sake of charity, the fact that women worked outside the home was not easily accepted in a society holding domestic ideology. Middle- or upper-class women who took their duty as a Christian (their mission) seriously and wished to be 'useful' in the society often faced strong opposition from their family.

In this paper, the case of Charlotte Maria Tucker (1821-1893) is examined as an example of such middle-class women. Though Tucker's name has long been forgotten, she was a well-known writer of children's tales, and later in her life she became a foreign missionary. Her career is certainly exceptional, but she also encountered the type of difficulties which many women of the period experienced. The paper first describes the exact nature of her difficulties and how she managed them. Then, it goes on to discuss how the mission which seems to have finally liberated her from the social bind of her country can be interpreted totally differently in its social and historical context.

# 19世紀英国における女性とミッション ——海外宣教師 Charlotte Tucker の場合

田村 真奈美

19世紀の英国において福音主義は大きな影響力を持っていた。良きクリスチャンであろうとした女性たちは、この福音主義の影響のもと、自分自身のことよりも周囲の人々の要求を優先させるよう教え込まれた。周囲の人々といえは直近には家族ということになるだろうが、拡大すれば同じ社会に住う人々をも指し、この時代とくに女性による慈善活動が盛んであったのはこのような利他主義が女性の間に浸透していたからと考えられる。しかしながら、たとえ慈善活動であろうと家庭の外で社会的な活動に関わるということは、当時の社会を支えていた *domestic ideology* に抵触する。社会における良きクリスチャンとしての自らの使命（ミッション）を真剣にとらえた女性たちが家族との葛藤を経験するというのはよく見られたことである。

本稿ではその一例として Charlotte Maria Tucker (1821-1893) を取り上げる。タッカーはまず、A.L.O.E (A Lady of England) の筆名で子どものための教訓話の作者として世に知られるようになる。生涯独身であったタッカーは、両親の死後、54歳で海外宣教師となってインドへ渡り、残りの生涯をそこでの宣教活動に捧げた。一見極めて例外的な人生を生きたとされるが、使命感に駆られて家庭の外に活動の場を広げようとした当時の中流階級の女性の多くが直面した苦難を彼女も経験しており、19世紀英国における宗教的使命感と女性をめぐる状況の一面を端的に示す好例ではないかと考えられる。タッカーについては Agnes Giberne によるかなり詳細な伝記 *A Lady of England: The Life and Letters of Charlotte Maria Tucker* (1895)<sup>1</sup> がある。また作家として、あるいは宣教師としての彼女に言及した資料も数点あり、これらをもとに彼女の人生におけるミッションをめぐる葛藤とその克服を検証する。その上で、彼女の果たしたミッションが社会的、歴史的に実ほどのような意味を持っていたのかという点にまで考察を広げたい。

## 家庭環境と少女時代

シャーロット・マリア・タッカーは 1821 年 5 月 8 日に London 郊外で生まれた。父 Henry St.

George Tucker (1771-1851) はかつてインドの Bengal で行政官を務めており、シャーロットが5歳の時には東インド会社の重役となった。母 Jane は Scotland の Edinburgh 出身で、*The Life of Samuel Johnson* (1791) を書いた James Boswell (1740-95) の親戚でもあった。このようにシャーロットは富裕な中流階級の家庭に生まれ、またその家庭はインドと深いつながりがあった。

シャーロットは元気で活発な少女で、また非常に賢く野心家でもあった。少女期の自分がいかに野心家であったか、後に彼女はこう回想している。

‘What a proud ambitious little creature I was! I have a pretty vivid recollection of my own character in youth. I should have liked to climb high and be famous.’ (Giberne 14)

「上を目指したい、名声を得たい」と願う娘にとって上流あるいは中流階級の家庭はしばしば窮屈であった。この時代の女性は何よりも「家庭の義務」を優先すべきであったが、上・中流階級の娘にとっての家庭の義務とは何よりも社交であった。<sup>2</sup>シャーロット自身は社交的な性格で、頻繁に訪れる来客をもてなすことを苦にしていた様子は、少なくとも伝記からは読み取れない。しかし、一家のつきあいは広範囲に渡っていたようであるのに、タッカー家の娘たちにはほとんど親しい友人がなく、同年代の友人といえるのは姉妹だけだった。さらに、1847年にはシャーロットの兄 Robert の3人の子どもがタッカー家に同居することになり、子どもたちの世話と教育をシャーロットも手伝うことになった。当時、子どもと病人の世話は女性ならではの仕事とみなされており、彼女がこれを手伝うことは当然のことだった。

しかしながらシャーロットの性質を考えれば、これら家庭内の義務だけで満足していたとはとても思えない。実際、彼女は自らのエネルギーの発露を執筆活動に見いだしていた。父は彼女の執筆活動を奨励したというが、父の存命中に出版された作品はない。彼が許したのは家庭内で私的に行う執筆活動であって、娘が職業作家になることは許容範囲を超えていたのであろう。また、少女時代に福音主義的の信仰に目覚めた (Giberne 28) 彼女は、近隣の貧しい人々のもとを訪れて力になりたいと願うようになっていたが、貧困地域を訪れることで娘たちが病に感染することを恐れた両親はなかなか許可しようとはしなかった。それでもあきらめず機会を待ち続けたシャーロットに、両親も 1851年初めにはしぶしぶ同意している。彼女と姉の Fanny は Marylebone Workhouse<sup>3</sup> を訪問するようになり、それはファニーの健康が衰え始めた 1864年頃まで続いた。

### 子どものための物語作家として

シャーロット・タッカーによる子どものための物語として最初に出版されたのは *The Claremont Tales* (1851)、シャーロットが30歳の時のことだった。執筆時期は明らかではないが、書き上げた物語を彼女はロバートの子どもたちに読み聞かせ、その後母に見せた、と伝記にはある。(このとき父は既に亡くなっていた。)そして母の助言により、シャーロットは出版社に原稿

を送ったのである。原稿に添えられた手紙（1851年11月19日付け）を見てみよう。

'SIR, – It has for some time been my anxious desire to add my mite to the Treasury of useful literature, which you have opened to the young as well as the old.

'The Tales which I now venture to offer to you for publication were originally composed for young children under my own charge, and were listened to with an appearance of interest, which gives me hopes that they may meet with no unfavourable reception from others of the same tender years.

'I ask for no earthly remuneration; my position in life renders me independent of any exertions of my own; I pray but for God's blessing upon my attempts to instruct His lambs in the things which concern their everlasting welfare; and deeply gratified should I feel, were my little work to be classed among the numerous valuable publications which you have already given to the world.

'The Tales might be printed separately, as each forms a complete story, though all are united by connecting links.' (Giberne 92)

この手紙で注意を引くのは、「もともと自分が面倒を見ている子どもたちのために書いたもので、子どもたちが喜んだからほかの子どもたちにも読ませたいと思った」、「生活に困っているわけではないので報酬はいらない (I ask for no earthly remuneration)」などと書き連ね、職業作家と見られまいと気を使っている点である。中・上流階級の女性が職業を持ち公的領域に出ることは体面 (respectability) を汚すことと考えられたからである。また、'useful literature' という表現はその物語が福音主義的な教訓話であることを示唆しているが、物語の執筆が単に自分を満足させるためではなく社会の役に立ちたいという使命感に駆られてのものである、ということもここからは読み取れる。さらに、先に述べたように出版社に原稿を送ったこと自体、自発的にしたことではなく母の勧めに従ったからであって（少なくとも伝記はそう説明する）、親の意向に素直に従う娘の鑑ということにもなるのである。

この最初の出版がうまくいってから、彼女は子ども向けの物語を量産し始め、少なくとも年に1、2作は発表していた。彼女の執筆活動があくまで家庭での義務を果たす合間に行われたことを考えれば、十分に多作だと考えられよう。この頃ロンドンでは若い女性が家庭の外で慈善活動に携わることが「流行」していたが、シャーロットと姉のファニーは母の希望に従って家庭の外での活動は諦めていたという。その 'beautiful self-restraint' に感銘を受けたという家族の友人はこうも述べている。'…they were content to devote their time, talents, and energies to successive generations of juveniles and elder guests, without a murmur.' (Giberne 114) 他人の要望を優先する女性像は、まさにこの時代の女性に望まれた姿であった。<sup>4</sup>そして、シャーロットはこの義務の合間に執筆活動をやっているのけるのである。彼女は毎朝6時に起き、誰にも邪魔されずに仕事をする時間を朝食前に確保した。朝の執筆は寝室で行ったが、家族のための仕事に追われる昼間は自

室にこもるわけにはいかず、居間が彼女の仕事部屋となった。居間には人の出入りが絶えず、執筆に集中することは難しかった。シャーロットの姪の一人はこう証言している。

‘How often have I gone in and out of her room, with a freedom which now almost surprises me! but she never seemed interrupted by my entrance. I have seen her put down her pen, though she was evidently preparing MS. for the press, and attend to any little thing I wanted to say, without one exclamation of vexation or annoyance, or a resigned-resignation look, that some people put on on such occasions, at her literary work being put a stop to. And yet I am sure that was not because she did not mind being interrupted.’ (Giberne 118)

こうして、彼女の創作活動はあくまで素人としての立場で、本名を明かさず筆名を用いて、家庭での義務の合間に行われたのである。A. L. O. E. (A Lady of England) という奇妙な筆名を用いたのは、公の場に出ることがレディらしくないことであった時代に、自らの素性を知られることなく作家として公の場に出るための「戦略」であり、当時女性作家が筆名を用いたり、匿名で執筆活動をするのは珍しいことではなかった。

彼女の執筆活動はインドへ渡ってからも続き、当時はかなり知られた存在だったようである。例えば、1897年に出版された *Women Novelists of Queen Victoria's Reign* のなかに、The Brontë Sisters, Mrs. Gaskell, George Eliot らにまじって、15人の女性作家の一人として名を連ねている。ただし、ここでタッカーについて論じた Mrs. Marshall は、「今ほど子ども向けの本が多くなかった40年前には、子どもたちは喜んで A. L. O. E. の本を読んだ」(293) という書き出しからもわかるように、タッカーの物語をあまり評価していない。これは、彼女の物語が福音主義の影響を強く感じさせる、宗教色の強いもので、19世紀半ばには広く流通していたが19世紀末には時代遅れとなっていたからであろう。<sup>5</sup> マーシャル夫人は、タッカーの作品には「そこここにユーモアのきらめきがある (there are flashes of humour sparkling here and there)」(294) ことは認めながらも、結局は「道徳を押しつけ」「長くとりとめのないお説教」を好んで垂れる「教訓話 (didactic stories)」(294) と一言で片付けている。<sup>6</sup>

家庭において娘としての義務を果たしながら執筆を続けたシャーロットの生活が一変するのは、1869年の母の死によってであった。これによって残された未婚の娘たち、シャーロットとファニーは住む家を失い、兄弟の家に世話になることになる。さらに同年末に、すでに長く病床にあったファニーも亡くなる。シャーロットはその後6年間兄弟の家で暮らしたが、自活できる財産を持っていた彼女は、実は両親と病身の姉を失ったことで、人生で初めて自分の思い通りに過ごせるときを迎えていた。

## 宣教師としてインドへ

姉ファニーが亡くなったときにシャーロットは、もう少し若かったら宣教師として海外へ行かれたのに、と悔やんだという。その彼女がそれから6年後に海外宣教師になる決心をした。1875年3月24日付けの妹宛ての手紙に彼女はこう記している。

‘Years ago I said that if I were not too old to learn a new language I should probably—after sweet Fanny had departed—have gone out as a Missionary. This year the question came to my mind, *Am* I really unable to learn a new language? I find that I can learn, and the only real objection to my going is taken away.’ (Giberne 176)

タッカー家はもともとインドとのつながりが深く、兄弟も次々インドへ渡っていたため、彼女はインドへの派遣を希望していた。上記の手紙の続きには「2月からヒンディー語を勉強しています」ともある。

彼女が参加した宣教会は *zenana mission* を行っていた *the Indian Female Instruction Society* という女性宣教師の団体だった。*Zenana* とはインドの上流階級の家庭にみられた女性だけのための部屋のことである。将来を担う子どもをクリスチャンにするためにも現地の女性（母親）に布教することは重要だと考えられていたが、男性の宣教師では *zenana* の中にいる女性に近づくことはできなかった。19世紀前半には海外宣教師といえば男性で、女性は宣教師の妻あるいは姉妹として随行するケースがほとんどであったが、19世紀後半になると女性宣教師が急増する。その大きな要因がこの *zenana mission* であった。<sup>7</sup> タッカーが参加した *the Indian Female Instruction Society* は国教徒も非国教徒も所属した団体であったがのちに分裂し、1880年に国教徒だけで *Church of England Zenana Missionary Society (CEZMS)* が創設されると、タッカーもこちらに移った。

タッカーの宣教師としての身分は特殊なものだった。普通、宣教師は所属する宣教会から給料を貰って生活していた<sup>8</sup>が、タッカーは給料を受けず、自費ですべてをまかなった。彼女には自活できるだけの財産があったからであるが、生活のために働くことは中流階級の女性の体面を傷つけることになるという事情もあった。（彼女が物語作家として活躍しながらそこから収入を得ようとしなかったのもこのためであったことは既に述べた。）また、50歳を過ぎた女性を宣教会が受け入れたのも、彼女が給料の支給を受けない、いわばヴォランティアだったからでもあった。

1875年10月、シャーロット・タッカーは宣教師となり、英国を離れインドに渡る。彼女が最初に派遣されたのは *Punjab* 地方の都市 *Amritsar* だった。ここは人口13万5千人の大きな町で、宣教活動もすでに盛んに行われており、教会やクリスチャンの子女のための学校も設立されていた。*Amritsar* に着くやいなや彼女は妹に手紙を書いている。自分にあてがわれた住居が想像以上に素晴らしいこと、インド人の改宗者にことばを習っていること、初めて同行した *zenana*

mission での驚き、孤児院で学ぶ現地の少女たちの様子などが次々と語られ、新しい生活に胸躍らせる、好奇心に溢れた様子が見て取れる。(Giberne 205-6)

Amritsar に到着して1年後、タッカーはそこから24マイルほど東の Batala に移ることになった。Batala にはまだ常駐する宣教師がおらず、新たに伝道所 (station) をつくるために派遣されたのである。Amritsar とは違い、英国人宣教師が暮らす環境は整っていなかったが、タッカーは相変わらず前向きで新しい土地での生活に張り切っていた。結局この Batala が彼女の約束の地となり、ここで18年あまりの年月を過ごすこととなる。<sup>9</sup>

インドでの彼女の主な仕事は zenana mission と、インドのクリスチャンのために物語やパンフレットを書くことだった。彼女の本やパンフレットはインドの諸語に翻訳され、安価で販売された。また、クリスチャンのインド人子弟のための学校で英語を教えたり、生徒が演じる劇や歌う歌を書くこともあった。

その年齢から慣れない気候の土地での健康が心配されていたが、彼女はいたって元気で晩年の数年間を除いては病気にもほとんどかからなかった。病気療養のため、あるいは長期休暇で英国に帰国する宣教師が多いなか、タッカーは結局一度も帰国せず、現地での休暇もあまり取らなかったことで知られている。社交的で明るい性格だったために宣教師仲間にもすぐに受け入れられ、'Auntie' と慕われた。現地の人々にも受け入れられやすかったが、それは彼女の年齢と瘦身、そして独身であることが有利に働いたためだと本人は分析している。'The Natives reverence grey hairs'. (Giberne 237) 'My being elderly and unmarried seemed to be giving an impression that I was a kind of saint or faqir, —perhaps my being thin and wearing my faithful old green dress added to the impression.' (Giberne 249) そして何よりも現地のことを知ろう、溶け込もうとする姿勢が彼女には顕著だった。<sup>10</sup> 1877年から20年間 the Punjab and Sindh Corresponding Committee の事務局長を務めた Rev. Robert Clark はこう書いている。

'Her first endeavour on her arrival in India, as she said, was to seek to "Orientalise her mind." She noticed everything, watched everything around her, sought intercourse with the people, and tried to think with their thoughts and feel with their feelings, and to realise their position and circumstances, in order that she might bring God's Word to bear on them *as they were*. It was in this way only that she could hope to do them good.' (Giberne 214)

こうしてインドの生活に馴染むことで宣教活動をうまく進めようと考えていたタッカーであったが、実際には宣教師としては結果を残せなかった。つまり、ほとんど改宗者をもたらしできなかったのである。Zenana に出かけても滞在時間は短く、体系的に教義を説明することなどはなかった。(Giberne 303) その大きな理由はことばの問題だった。タッカーはヒンディー語の文法はマスターしたもののほとんど話すことはできず、それ以外の諸語や方言についてもあまり上達はしなかったのである。なかなか改宗者が出ないことは本人も気にしていたようである。

(Giberne 350-1) しかしながら、クラーク師による *The Missions of the Church Missionary Society and the Church of England Zenana Missionary Society in the Punjab and Sindh* (1904) にはタッカーへの言及があり、物語やパンフレットの執筆による貢献はある程度認められていたと思われる。シャーロット・タッカーは1875年に英国を離れてから結局一度も帰国しないまま、1893年12月2日 Amritsar で亡くなり、Batala の墓地に埋葬された。

## 結 女性のミッションの社会的・歴史的意味

19世紀の中流階級の人々に広く浸透していたミッションの概念は、使命感に燃える女性の社会参加を促すことにつながった。タッカーが書いたような子ども向けの教訓話が盛んに書かれ、その著者は主として女性だった。それらの物語は日曜学校等で教材として使われ、贈り物としても人気があった。

また、タッカーが後半生に選んだ女性海外宣教師という道は、母国ではほぼ閉ざされていた教会活動に女性が積極的に参加できる道であり、また肉体的・精神的な強さも求められる生活は冒険心も満たしてくれるものであったろう。事実、英国で自らの進むべき道が見つけれない中流階級の独身女性（1890年以前の独身の女性宣教師はたいてい中流階級の出身で、労働者階級出身者は稀であった）<sup>11</sup> に対して、Liverpool 主教は CEZMS 創設1周年記念の説教でこのように述べている。

‘…many women fall into ill health at home, and break down in their nervous system for sheer want of occupation suited to their capacity, while much Christian work is to be done, and cannot be done for want of hands’.<sup>12</sup>

タッカーにとっても海外宣教師としての生活はまさに「自己実現」であった。Batala から妹に宛てた手紙には、かつての英国での生活からは想像もつかないほど現在の生活は ‘romantic’ で、現在の自分がいかに幸せかを綴った文章が見られる。

‘What an extraordinary and somewhat romantic position I am in, for an elderly lady, who in her youth hardly ever stirred from a London home! How amazed we should have been when we were girls, if we could have known that I was to find my home in an Oriental palace—afar from all Europeans—and itinerate a little in heathen villages! How good God has been to your loving sister!’ (Giberne 249)

ここには、新天地にやって来たことで旧世界の束縛から解放された喜びの興奮が感じられる。もともと福音主義の唱えるミッションは「服従 (submission)」、「自己否定 (self-denial)」が前提にあるのだが、そのミッションが女性たちを解放してもいたのである。



しかしながら、母国で彼女たちの可能性を閉ざしていた *domestic ideology* は実は宣教先にも及んでいた。宣教師の社会でも意思決定は男性宣教師に委ねられ、女性宣教師はあくまで男性宣教師のサポート役という位置づけだった。また、彼女たちは個人の家庭をまわって福音を説くことはできても、公の場所で、特に教会の中で説教をすることは認められなかった。ジェンダーの違いによる宣教師の役割の違いは、そもそもの宣教師としての訓練の違いにはっきりと現れている。CMS の場合、女性宣教師の養成機関は 1892 年によく創られた。(男性の場合、初期には大卒の若い聖職者が主に宣教師として海外に派遣された。その後、幅広い階級に門戸を開放して平信徒を受け入れたため、1825 年に *Islington* に宣教師養成機関が創られた。) つまり、それ以前の女性たちはとくに訓練を受けてはいなかったのである。さらに、宣教師の家庭は良きクリスチャンの家庭として現地の人々の模範となるべきであるともされていた。キリスト教の布教には英国的価値観が分かちがたく含まれ、そこには *domestic ideology* も当然含まれていたのである。

海外宣教活動は英国の帝国主義的拡大の一翼を確実に担っていた。このようなコンテキストのなかに置いてみると、タッカーの「自己実現」もまた違った様相を呈してくるであろう。このユニークな、しかし今は忘れ去られた一人の女性の生涯は、時代の支配的な力の構造とそのなかで葛藤を抱えながら奮闘する個人の姿を映し出しているのである。

## 註

1. 女性宣教師の伝記の多くは聖職者やその妻によって書かれ、宣教活動を世に広く知らしめて経済的サポートを得ること、宣教師の候補者を募ること、がその主な目的であった。そのため女性宣教師は聖女のように描かれていることが多い。ところが *Giberne* による伝記は、タッカーの欠点も失敗も示したうえでなお彼女のミッションに対する真摯な姿勢を賞揚するものとなっている点が、他の宣教師の伝記とは異なっている。*Agnes Giberne (1845-1939)* は、タッカーと同じく、福音主義の影響のもとで子どものための教訓話を数多く書いた作家であった。
2. タッカーとほぼ同時代を生きた *Florence Nightingale (1820-1910)* は上流階級の出身だが、エッセイ *Cassandra (1860)* において *Women have no means given them, whereby they can resist the "claims of social life."* (35) と書いている。ナイティンゲールもまた看護というミッションをめぐる家族との葛藤を経験したことはよく知られている。
3. ロンドンのメリルボーンにあった救貧院。
4. この問題についてナイティンゲールは次のように怒りを込めて書いている。 *Women are never supposed to have any occupation of sufficient importance not to be interrupted, except "suckling their fools;" and women themselves have accepted this, have written books to support it, and have trained themselves so as to consider whatever they do as not of such value to the world or to others, but that they can throw it up at the first "claim of social life."* They have accustomed themselves to consider intellectual occupation as a merely selfish amusement, which it is their "duty" to give up for every trifler more selfish than themselves. (*Cassandra* 32)
5. 「ただ娯楽のためではなく為になる読み物」は主として福音主義者によって 18 世紀後半以降盛んに書かれた。1836 年から 1863 年の間の英国における全出版物において宗教的な出版物が占める割合は 33.5% にもなったという。(Jay 6)
6. マーシャル夫人も特にとりあげている物語 *The Rambles of a Rat (1857)* は、2001 年に出版された *Children's*

*Literature: An Anthology 1801-1902* にその一部が収められており、著者紹介欄にはこの物語につけたタッカーの序文が紹介されている。

7. Cf. 'Work in the Zenanas of India and the harems of the Mohammedans is only possible to a woman, and through such work she may, by raising the tone and character of the women of a district, with God's blessing, regenerate the whole Eastern world.' 'Through their children [women] have charge of future generations, and thus those who rock the cradles may be said to rule the world.' G. A. Spottiswoode, *The Official Report of the Missionary Conference of the Anglican Communion on May 28, 29, 30, 31 and June 1, 1894* (London, SPCK, 1894), 579. Quoted in Gill 175.
8. このためとくに男性のなかには母国での貧しい暮らしから抜け出すために海外宣教師をめざす者もいた。一方、女性のなかには結婚相手を探すことが目的で海外宣教師になる者もいた。タッカーは、宣教先に来てすぐに結婚してはミッションを放棄してしまう女性宣教師に非常に批判的で、英国を出てから3年以内に結婚して辞めてしまう女性宣教師には罰金を科すべきだ、とまで言っている。(Giberne 269)
9. 18年に渡るタッカーの *Batala* 滞在の間に町も変化を遂げた。彼女が初めて訪れた頃には共に派遣された女性宣教師以外にヨーロッパ人を見ることはなかったが、次第にヨーロッパ人の数も増え、1886年には教会も完成した。また、*Amritsar* との間には鉄道が敷かれ、容易に行き来できるようになった。
10. インドの生活に馴染もうとするあまり、現地の人々の服装までも真似ようとして止められているほどである。(Giberne 244-5)
11. J. Isherwood, 'An Analysis of the Role of Single Women in the Work of the Church Missionary Society, 1804-1904, in West Africa, India and China', University of Manchester MA thesis, 1979, appendix tables 6b and 9a. Quoted in Gill, 181.
12. *Third Annual Report of the Church of England Zenana Missionary Society for 1882-3* (London, CMS, 1883), 16. Quoted in Gill, 181.

## 参考文献

- Clark, Robert. *The Missions of the Church Missionary Society and the Church of England Zenana Missionary Society in the Punjab and Sindh*. London: Church Missionary Society, 1904.
- Etherington, Norman, ed. *Missions and Empire*. Oxford: OUP, 2005.
- Giberne, Agnes. *A Lady of England: The Life and Letters of Charlotte Maria Tucker*. London: Hodder & Stoughton, 1895.
- Gill, Sean. *Women and the Church of England: From the Eighteenth Century to the Present*. London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1994.
- Hunt, Peter, ed. *Children's Literature: An Anthology 1801-1902*. Oxford: Blackwell, 2001.
- Jay, Elisabeth. *The Religion of the Heart: Anglican Evangelicalism and the Nineteenth Century Novel*. Oxford: Clarendon Press, 1979.
- Johnston, Anna. *Missionary Writing and Empire, 1800-1860*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Nightingale, Florence. *Cassandra: An Essay*. 1860. NY: The Feminist Press at The City University of New York, 1979.
- Mrs. Oliphant, et al. *Women Novelists of Queen Victoria's Reign*. London: Hurst & Blackett, Ltd., 1897.
- Telford, John. *Women in the Mission Field: Glimpses of Christian Women among the Heathen*. London: C. H. Kelly, 1895.
- Ward, Kevin & Brian Stanley, eds. *The Church Mission Society and World Christianity, 1799-1999*. Grand Rapids, Michigan & Cambridge: William B. Eerdmans Publishing Co., 2000.